

たことがある³。

研究者資料は、各地の博物館・図書館・文書館のほか、研究所内の「史料室」や「記念室」など、さまざまな機関で保管されている。たとえば東京大学文書館では、教職員が職務上作成してきた文書(特定歴史公文書等)と、同窓会などの団体や個人から収集した資料(歴史資料等)を所蔵しており、研究者に由来するものが少なくない。あるいは、高エネルギー加速器研究機構(以下、KEK)には史料室が設置されており、主に研究者から寄贈・寄託された学術資料の収集・整理・保存をおこなっている。これらをはじめとするアーカイブズの大きな特徴は、所蔵資料を組織の外部に対しても公開し、調査研究などに供していることである。

資料保存機関では、新たに受け入れた資料について目録を作成し、インターネットなどを通じて公開した上で、外部からの利用を受け付けることが一般的である。しかし、数点の資料で内容がはっきりしているものならばともかく、研究者の自宅や研究室に残されていた資料をまとめて引き取ったような場合には、整理に膨大な手間と時間と費用がかかる。さらに学術研究に関わる資料となると、その分野の専門的知見が無ければ整理そのものが難しいということもあるだろう。結果として、とりわけ小規模でリソースが十分でない組織の場合には、目録が作られていなかったり、公開されていなかったりすることは珍しくない。せっかく資料が保管されているのに、活用が進まないという事態が生じてしまうのである。

概要目録のデータベース

状況を改善していくためには何が必要だろうか。

研究者資料の活用をめざして

—概要目録の標準フォーマット構築の試み—

有賀暢迪 ありが のぶみち

一橋大学大学院言語社会研究科

森本祥子 もりもと さちこ

東京大学文書館

高岩義信 たかいわ よしのぶ

高エネルギー加速器研究機構広報室・史料室

「研究者資料」は科学技術の歴史を知る上で重要な一次資料である。さまざまな機関で保管されているが、資料を整理してリスト化することは容易でなく、活用が進まない一因となっている。本稿では「概要目録」を作って公開するという方法を提案し、そのための具体的な標準フォーマットを紹介する。

研究者資料とアーカイブズ

科学技術の人文・社会科学的研究、とりわけ歴史研究にとって重要な一次資料として、研究者個人に由来する資料(以下、研究者資料と呼ぶ)がある。具体例の一つ挙げると、国立科学博物館理工学研究部では、戦前期の日本を代表する物理学者、長岡半太郎(1865-1950)の資料を所蔵している。これには日記・ノート類、草稿、書簡、論文別刷、辞令、写真、勲章など多岐にわたる資料が含まれ、長岡の生涯を研究活動と私的生活の両面から窺うことができる¹。実際、この資料は今から半世紀ほど前、長岡の詳細な伝記が書かれた時に活用された²。また本稿の筆者の一人(有賀)は、以前に国立科学博物館に勤務していた際、長岡半太郎資料の書簡を題材とした連載を本誌でもたせていただい

筆者らの提案は、個々の資料(アーカイブズの用語では「アイテム」と呼ばれる)を1点ずつ記述していく一般的な資料目録ないしはデータベースを作るのに先立って、資料群全体(アーカイブズの用語では「フォンド」)について記述した目録を作成し、それをまず公開してはどうかというものである。先に紹介した長岡半太郎資料の例で言えば、ノートや書簡といった個々の資料をリスト化していく作業はもちろん重要なのだが、それとは別に、長岡半太郎資料にはどのような資料がどのくらい含まれているのか、この資料群はどのような来歴をもつのかといった全体に関わる情報を記述するということがある。実のところ、これ(フォンドレベルでの記述)は文書館では通常おこなわれていることなのだが、博物館をはじめとするほかの種類の機関では必ずしも一般的な習慣ではない。以下ではこのような、資料群全体を記述するものを「概要目録」と呼ぶ。

概要目録についての注目すべき先例としては、アメリカ物理学協会(AIP)のニールス・ボーア図書館が提供する物理学史資料情報データベース(International Catalogue of Sources, ICOS)がある。これは個々の資料を横断検索するようなものではなく、各機関から提供された概要目録(のみ)を収録しているというユニークなデータベースである。公式ウェブサイトによれば、ICOSには世界の900カ所以上の機関が所有する資料群が計1万件以上登録されている(ただし実際に検索してみると、大半の資料はアメリカ国内のものである)⁴。物理学史の研究者にとっては、このデータベースがいわばポータルサイトの役割を果たしており、資料の発見可能性を大幅に高めている。

そこで、ICOSに類似した概要目録のデータベースを日本国内でも構築できれば、研究者資料の活用が進むことが期待される。しかし、これは単にデータベースのシステムを作ればよいという話ではなく、データとしての概要目録がまず作られなければならない。ここで問題になるのは、そもそも概要目録には何をどのように記述すればよいのか、ということである。言い換えると、概要目録のフォーマットを定める必要が生じてくる。

標準フォーマット構築の試み

そこで筆者らは、研究者資料を資料群単位で記述するための標準的な目録フォーマットを構築することに取り組んできた。これは簡単なことのように思えるが、実際はそれほど単純ではなく、二つの方向から同時に検討することが不可欠である。

第一は、アーカイブズの国際標準となっている目録規則に即したフォーマットにすることである。国際標準に合わせた設計にしておくことは、将来、海外との情報流通を図っていく上で重要と言える。ところで、アーカイブズ分野では資料を記述するための国際的な枠組みが何種類か存在しており、それぞれに特徴がある。専門的になるため詳細は割愛するが、今回の試みでは国際公文書館会議(ICA)の諸標準を用いることにし、資料群そのものについてはISAD(G)を、資料作成者の情報はISAAR(CPF)を、資料保存機関の情報はISDIAHをそれぞれ基礎とした⁵。

第二は、日本国内の研究者資料に対して実際に適用でき、かつ、運用がなるべく容易になるようなフォーマットにすることである。これは具体的には、国際標準で定められている多数の項目の中から目的に適したものを絞り込んだり、適宜変更を加えたりすることによってなされる。言うなれば、「国際標準に準拠しつつ、研究者資料の概要目録の実用的にカスタマイズされた標準フォーマットを作る」というのが筆者らの取り組んだ課題であった。

机上の空論では意味がないため、フォーマットの構築は、日本国内で実際に保管されている資料群の実例に照らしながら進めた。つまり、フォーマットの家を作成して実際に記述をおこない、そこで出てきた改善点をフィードバックしてフォーマットを修正するという手順を繰り返した。その際、研究者資料の中でも物理学者の資料はまとめて保管されている例が比較的多く、筆者らが現状をよく把握できていることから⁶、物理学者資料を中心的な対象として検討を進めた。とはいえ、

構築したフォーマットそのものは、物理学に限らずほかの分野の研究者資料に対してもおそらく有効であろうと考えている。

概要目録フォーマットと記述の実例

最終的に筆者らは、先に言及した国立科学博物館理工学研究部、東京大学文書館、KEK 史料室のほか、日本物理学会の物理学史資料委員会、筑波大学アーカイブズ、東北大学史料館、自然科学研究機構核融合科学研究所の核融合アーカイブ室から協力を得て、それぞれが所蔵する具体的な資料群を対象とした概要目録を作成した。ここでは

そのうちの一つ、「東京大学宮本梧楼研究室電子シンクロトン関係資料」(国立科学博物館理工学研究部所蔵)に即して、策定したフォーマットと、日本語による記述の実例(表1)を示す。

本稿ではすべての項目を説明することは差し控え、非公開や空欄となっている箇所を中心に補足するにとどめよう。まず、「レファレンスコード」はその資料群のIDに相当し、国コード、所蔵機関コード、所蔵機関での管理番号という三つの要素を組み合わせたものである(機関によっては管理番号を外部に公開していないため、この例では****となっている)。なお、所蔵機関と作成者名の情報については、ここで示したものとは別のデータベースに詳

表1—概要目録フォーマットの実例

項目名	記述例
レファレンスコード	JP-R0002-****
タイトル	東京大学宮本梧楼研究室電子シンクロトン関係資料
タイトルヨミ	トウキョウダイガクミヤモトゴロウケンキュウシツデンシシンクロトンカンケイシリョウ
内容摘記	東京大学理学部の宮本梧楼の研究室で製作された電子シンクロトンの装置部品と文書類。
分量	52点
内容	東京大学理学部の宮本梧楼(1911-2012)の研究室で1950年代に製作された加速器の一種、電子シンクロトンの装置部品と文書類。装置部品としては電磁石や真空容器(ビームパイプ)などがある。文書類には、I: 図面, 説明書, 試験成績書, II: 装置の調整や測定の記録等, III: 物理関係の学術誌が含まれる。関連資料として、博物館での展示用に製作された模型がある。
編成	小分類: 「装置部品」「文書類」「その他」
使用言語	日本語, 英語
年代域(開始)	1954年
年代域(終了)	1965年
作成者名	東京大学理学部宮本梧楼研究室
来歴	1972年に東京大学から国立科学博物館に移管。
検索ツール	アイテムリストを含む資料解説が出版されている。国立科学博物館の標本・資料統合データベース(理工学資料)で検索可能。
URL	https://db.kahaku.go.jp/webmuseum/search?cls=col_e1_01
資料の閲覧条件	要問合せ
著作権・複写に伴う条件	
出版情報	有賀暢迪[ほか]「東京大学宮本研究室電子シンクロトン関係資料」『国立科学博物館研究報告E類: 理工学』43(2020): 31-40.
関連する他の資料	
備考	
管理情報	【非公開】
アーキビストの注記	【非公開】
登録日	【非公開】
最終改訂日	2024/3/31

しく記述しておき、相互に関連付ける形をとった。

「内容摘記」を「内容」と別に設けたのは、後者の記述が非常に長くなることがあるため、どのような資料群であるかを簡潔に表示するという目的からである。「編成」は、資料群に下位分類を設けて管理しているような場合に、その情報を記すことを想定している。「関連する他の資料」は、同一機関内で別の資料群になっているものだけでなく、他機関が所蔵する関連資料も対象となる。「著作権・複写に伴う条件」は、著作権法に伴う一般的な条件や、所蔵機関が定めている規則については書かなくてもよいこととし、この資料群に固有の特記事項があれば記すという方針を採った。最後に、「アーキビストの注記」とは、この記述を誰がどのように作成・改訂したかを記すもので、「登録日」「最終改訂日」とともにデータ自体の成り立ちを記録する項目である。

実のところ、ここで記述例として挙げた資料群については、以前に筆者ら(有賀・高岩)を含むチームで調査をおこない、報告を出版している⁷。個々の資料の情報については、博物館の資料データベースにも登録されている。しかしながら、ここで表形式にして示した記述はそれらよりもかえって一覧性が高く、資料群の全体像を端的に捉えることが可能になっている。さらに、この事例は文書館が通常扱う文書類だけでなく装置部品という博物館的なモノ資料も含んでおり、今回構築したフォーマットが所蔵機関の種別を超えて適用できることを示している。

研究者資料の活用をめざして

冒頭で述べたように、研究者資料に含まれる資料の種類は多岐にわたり、研究者資料を所蔵している機関もまたさまざまである。研究者資料の目録のフォーマットは、そうした資料の多様性に対応できるものでなければならない。同時に、予算も人手も十分ではない組織であっても、比較的簡単に目録を作成できることが強く望まれる。

筆者らとしては、今回構築したフォーマットが

(今後さらに細かな修正はありうるにせよ)多くの機関で採用されることを願っている。そうすれば次の段階として、概要目録を集めたデータベースを立ち上げることが現実的に可能となるだろう。本稿で提案してきた方法——資料1点ごとの目録を作るのではなく、標準フォーマットに即した概要目録をまずは作って公開する——が、研究者資料の活用を促進するための有力な方策となることを期待したい。

謝辞 本稿は、公益財団法人日立財団2022年度(第54回)倉田奨励金(人文・社会科学研究部門)「研究者資料アーカイブズの目録標準化に向けた記述フォーマットの構築：物理学者資料を中心に」(代表：有賀暢迪、共同研究者：森本祥子、高岩義信)による研究成果にもとづくものです。研究の過程でお世話になった資料保存機関の方々や、研究会を通じて有益な意見を下さったアーカイブズ関係者の皆様に、御礼を申し上げます。

文献

- 1—有賀暢迪・沓名貴彦：科学史研究，**53**(272)，403(2015)
- 2—板倉聖宣・他：『長岡半太郎伝』。朝日新聞社(1973)
- 3—有賀暢迪：科学，**88**(10)，975(2018)ほか
- 4—Niels Bohr Library & Archives | American Institute of Physics. <https://www.aip.org/history-programs/niels-bohr-library>(2024年5月1日閲覧)
- 5—ISAD(G): General International Standard Archival Description - Second edition - ICA (<https://www.ica.org/resource/isadg-general-international-standard-archival-description-second-edition/>); ISAAR(CPF): International Standard Archival Authority Record for Corporate Bodies, Persons and Families, 2nd Edition - ICA (<https://www.ica.org/resource/isaar-cpf-international-standard-archival-authority-record-for-corporate-bodies-persons-and-families-2nd-edition/>); ISDIAH: International Standard for Describing Institutions with Archival Holdings - ICA (<https://www.ica.org/resource/isdiah-international-standard-for-describing-institutions-with-archival-holdings/>)(いずれも2024年5月9日最終確認)
- 6—高岩義信：科学史研究，**53**(272)，400(2015)
- 7—有賀暢迪・他：国立科学博物館研究報告E類：理工学，**43**，31(2020)